

平成維新を実現する会関連の皆様へ

神奈川県津久井町 平岡昭三

前略、長らくご無沙汰致しておりますが、皆様お元気ですか。私も近く満68才になりますが、お陰でどうやら元気に過ごしております。私は今日は、三つのことを申しあげたいと思います。

第一は選挙のこと、第二は私の地元の露地裏の住民運動のこと、第三は平成維新を実現する会の関連の全国の皆様が今後注力すべきことへのヒントの話を申しあげたいと存じます。

選挙のこと

選挙も終わって、やれやれということですね。結果は大方の予想通りですね。私は、平成維新の会事務局の東京10区民主党長妻昭氏を応援しました。友人を数十名紹介しました。宛名書きも1,300枚書きました。33,480票で3位でした。善戦健闘だったと思います。次回を期すべきでしょう。

それにしても各党の行革ごっこのスローガンが、今後、与党でどれだけ実行されるか、又がっかりさせられるか、注視いたしましょう。しかし各党の云ってる事だけは全て、大前研一会長が云って来た事に限りなく近づいて来ましたね。鳩山代表などは、これは平成維新だ、と言ったりして、ぎょっとしましたね。何れにしても、私たちが会長にいち早く共鳴して来た事が、如何に正解であってかと言うことを如実に示していますね。

私は10月6日毎日新聞の「私は言いたい」に対し、次のように答えました。

*****毎日新聞記事*****

『方法論も無しに、行革を口にするな!』

神奈川県城山町・平岡昭三さん(67)

なぜ、官僚は政界・財界・学界との癒着を断ち切れないのか。「官僚の新しい、あるべき生涯設計図の理論と方策」ができていないからだ。「天下り禁止」を断行しても、その後の方策がないから、官僚は必死に抵抗し、行革は挫折してしまう。もし禁止するのなら、65才定年制の導入(人事停滞の欠点がある)、退職金の高額化(もったいないが……)など、官僚を納得させてはじめて、行革ができる。方法論なしで、各党は行革を口にしてもらいたくない。

*****以上*****

そしたら之が次のように大見出しになりました。
『行革具体的提案を』『官民の受け皿構造見直し』
『官僚天下り廃止への道』『実質定年延長も必要』
大前会長に負けない位、鋭い論陣を張る「日本権力構造の謎」のカレル・ヴァン・ウォルフレンに云わせれば、市民のなすべき事は、「マスコミにガンガン意見を云うことだ」との事。正に、この通り、一人が云ってもこれだけの効果があるのですから、大いに皆さんで云おうではありませんか。大前通信パソコン・ネットで、内輪でマスターベーションしているだけでは勿体ないと思います。

露地裏市民運動のこと

私はここ数年、地元で住民運動をやってきました。住宅敷地内の建築制限規制排除運動であります。マスコミにも知らせておりました処、日本テレビが取材に参り、来たる10月28日(月)に次の通り、平岡軍団の動きを中心に報道するそうです。同日午後5時半から7時までの、ニュース・プラス・ワン番組の中で、露地裏の住民運動シリーズの一環として、6時23分から約20分間「城山町のグリーンベルト問題特集」という事になるようです。この番組は視聴率18%とかなり高く奥様方に人気があるそうです。関東と一部他地域です。

平成維新を実現する今後の活動へのヒント

私は、城山町長、町会議員、県会議員等、城山町の行政に関係する多くの人々に、別紙の手紙を送りました。この中で私は、目から鱗の思い、と書きました。本当にその通りなんです。地方自治とはどういうことか、正直な話、今までは本当に只頭で考えるだけでした。中央の行革にしても同じ事です。しかし、この本を読んで始めて、真の行革とは、真の地方自治とは、なぜ道州制が必要なのか、等々が本当に少しわかってきた気がします。中央の行革なんぞ、糞食らえであります。

真の行革、真の地方自治のため、私たちは、今各地で何をなすべきか。この本を読んで、じっくり考えれば、自ずから道が開けるように思います。一人で考えるのは勿体無いと存じ敢えてヒントにと思っただけです。

*****著書紹介*****

《豊かさを生む地方自治について》

ドイツを歩いて考える

著者：木佐 茂男(北大教授)

発行：日本評論社(¥2,266)

近時、地方自治の強化が叫ばれております。真の地方自治とはどんなものか。日本の私たちにとっては、その経験もなくよくわかりません。時々、町の図書館で書評も良かったので上記の本を読ませて頂きました。

この本は、誠にすばらしい本です。目から鱗の落ちる思いでありました。ぜひ、皆さんにご講読をお勧め申し上げます。毎日のお仕事にきっと心を新たにして取り組むことが、出来ると思います。ドイツのことで日本は事情が違うなどと思わないで下さい。日本もこの様に変えねば真の自治、真の豊かな市民活動は来ないのだ、と言うことを痛感させられます。今の日本の中央政治なんて、あんなものは全く問題外です。真の日本の構築は、私たち現場から改革していかなければ出来ません。疑問点は著者に直接コンタクトしてください。(1996年10月25日受理)